

みずいり

## 水入遺跡範囲確認調査

**調査の経過** 水入遺跡は豊田市渡刈町字下槽目および大屋敷地内に存在し、碧海台地端から矢作川にかけて広がる遺跡である。調査は第二東海自動車道建設予定地内で実施した。調査方法は、16箇所の確認調査ラインを設定し、その周辺に確認試掘坑（T.T.）を設置した。断面観察と並行して各層位単位の遺構検出作業を行い、遺構の検出と出土状況を精査し、遺跡の性格とその範囲を確認することに主眼においた。なお、調査面積は1,600㎡である。

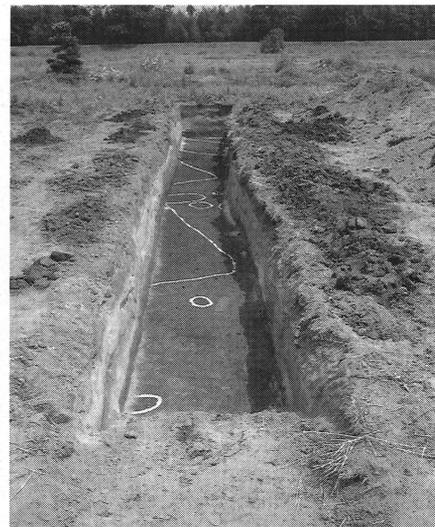
**調査の結果** 調査の結果から水入遺跡の範囲と性格を想定する。まずその範囲であるが、T.T.9-4は耕作土直下で礫層が露出し、区画整理の時点で遺物包含層および遺構面が削平されたと考えられる。また T.T.-16ライン周辺では、砂層が調査可能な深さ（現地表面から深さ4.0m程度）以上に堆積しており、このことから常にある程度の流水がある沼沢地のような環境であったことが考えられ、河川の影響を強く受けていたと思われる。この範囲以外は、①台地および台地端部には遺物包含層が残存しており、遺構が調査範囲全面に展開する可能性が高いこと、②沼沢地においても T.T.3-3や T.T. 14-2では護岸施設の可能性が考えられる遺構が確認されたこと、③その他の沼沢地においても堆積層から遺物が出土すること、からほぼ調査範囲全域が遺跡であると考えられる。

次に水入遺跡の性格については、出土した遺物の時期が古代・中世・戦国の3期に区分されることから、遺跡の中心となる時期も同様に3時期に区分される。その広がり、古代・中世に属する遺物が調査範囲全域で出土することから、遺跡全域に当該期の遺構が展開することが想定される。特に調査範囲中央部の T. T. 5・8・10のラインにおいて良好な遺物包含層とともに遺構が確認されていることから、この周辺が水入遺跡の中心部であると考えられる。これに対し、戦国時代の遺物は、大屋敷地区を中心として展開していると思われる。また、字下槽目と字大屋敷の字界周辺には小規模な谷地形が存在し、この場所で台地の落ち込みが確認されており、入り江状の地形を形成していることが考えられる。現状では規模、時期等の特定は困難であるが、矢作川との関連から、利水・治水に関連する遺構の存在も推定される。

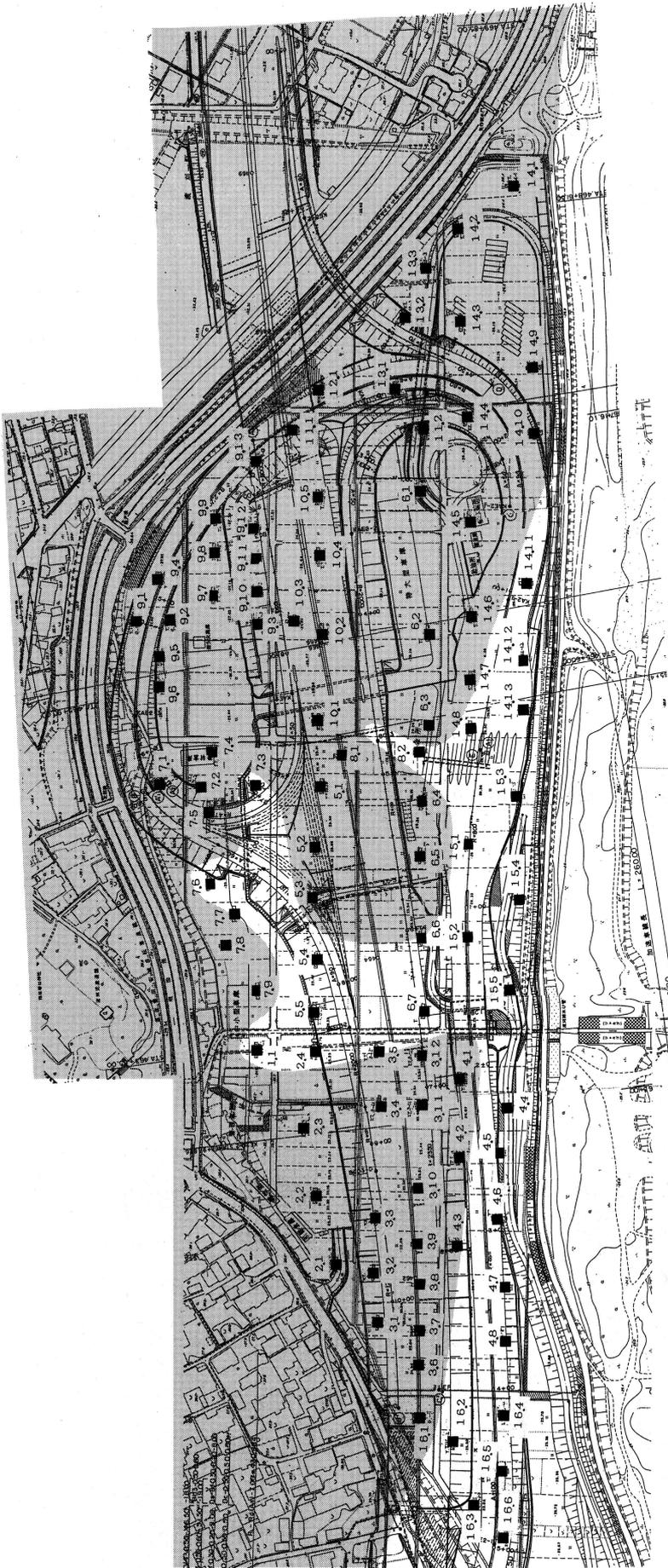
（川井啓介）



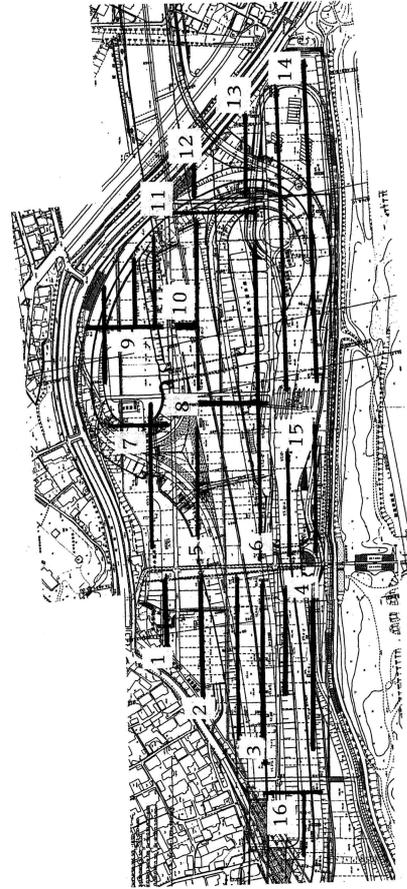
範囲確認調査作業風景



範囲確認調査T.T.8-1



第1図 範囲確認調査 調査トレンチ位置図 (1:4,000) アミ部分は台地



第2図 調査トレンチ認定ライン位置図